

2006年6月30日、看護師石上節子さん(61)は、末期の肝臓がんで在宅緩和ケアを選択した夫孝雄さん(当時58歳)の看護ノートにこう記した。

「本当に穏やかなお顔。いい看取りができてそう。在宅ホスピスでよかったね。あなたももう少しお世話させて下さい」
1週間ほど前から発熱が続いていた。黄だんもひどく、尿もほとんど出なくなった。自然の経過にまかせたいと、水分補給の点滴や酸素吸入などの医療的処置はもう行わなかった。

午前中に往診の看護師が帰ると、この1か月間繰り返し返したように、二人の思い出を振り返りながら「一緒になれてよかったね」と語りかけた。孝雄さんは比較的落ち着いていた呼吸で、まばたきを繰り返した。「分かったと相づちを打っ

第一部 自宅で看取る ㊦

最期の日も穏やかに

「ているようでした」

夕方、眠っている孝雄さんの手が、ベッドの柵を握りしめ動かなくなった。

「看護師の経緯で、いよいよ

よだなと感じました」

夕方に連絡した家族や親類が集まる中、最後に駆けつけた長男が「お父さん」と声をかけると、孝雄さんは目を大きく

く見開き、息を引き取った。夜

11時前、長男の到着を見届けたかのような旅立ちだった。病床には往診の医師やケアスタッフはいなかった。親しい者だけが臨んだ厳かな最期の瞬間。

「一番居心地のよい場所です。夫と歩んできた人生をきちんと振り返りました。子どもたちも父親への感謝の思いを確かめたと思います」。家族の気持ちが一つになったと信じている。

半年後、節子さんは、看取りを支えてくれた爽秋会の岡部健医師から「在宅緩和ケア充実」に力を貸してほしい」と誘われた。昨年3月、東北大病院緩和ケアセンターの看護師長を定年退職し、同会の看護部長に就いた。ケアする医療者と、それを受ける患者の家族双方の気持ちをよく知る経験を生かしたいと思う。

昨年、国が一般市民約25

00人を対象に実施した調査では、余命6か月以内になった場合、6割は「自宅での療養・看取り」を希望した。しかし、同時にやはり6割が「自宅で最期を迎えるのは実現困難」と考えていた。

「自宅で最期を迎えたくても、家族の看護負担などに遠慮し、病院を選択する人も少なくありません。でも、今は在宅でほとんどのケアができます。患者さんが後悔しない選択をできるようにお手伝いしたい」

孝雄さんの死は、節子さんに家族の絆だけでなく、在宅緩和ケアを支える大きな力も残してくれた。

(おわり、佐藤俊彰)

◆ 今後も終末期医療に関する記事を掲載していきます。ご感想や意見、体験などを読売新聞東北総局までお寄せ下さい。はがき(〒980-0002 1仙台市青葉区中央2の3の6)またはFAX(022・222・83386)、Eメール(tohoku@yomiuri.com)でお願ひします。



自宅の庭でほほ笑む石上さん夫妻。孝雄さん(左)が「余命1年」の告知を受ける少し前に撮影された(節子さん提供)